

神楽殿

神楽殿は、大人数での神事や結婚式、行事などを行うための儀式空間です。神楽とは「神々のための舞楽」という意味で、9世紀初頭まで遡ることができる神事舞踊の一種です。出雲大社の神楽殿は、出雲大社と宮司家（國造）に伝わる特殊な神事・儀式などを行うために建てられました。現在、神楽殿では一般の人々の結婚式や祈祷が行われています

神楽殿の最大の特徴は、入り口の上に吊るされた巨大な注連縄（大注連縄）です。長さ13.6 ㍓、胴回り8 ㍓、重さ5.2 トンで日本最大です。注連縄とは、神道の神聖な場所を示す藁を編んだ縄のことです。出雲大社の大注連縄は、社殿に向かって左から撚り合わされており、左の縄の先が太いのに対し、右の端が細くなっています。この特徴は出雲大社独特のもので、他の神社では右から縄が始まるのが一般的です。神楽殿の大注連縄は6～8年ごとに交換され、島根県中部の飯南町の有志によって製作されています。

注連縄の後ろには、「神光満殿（大国主の光に満ちて）」と書かれた大きな額が掛けられています。神楽殿の扉の上には、切妻を飾る大きなステンドグラスがあります。このステンドグラスには、社紋と出雲を象徴する色とりどりの雲が描かれています。神社建築ではスタンドグラスはあまり使われないため、これは珍しい例です。

神楽殿は1667年に造替されましたが、1982年に大国主神を祀る宗教法人・出雲大社教の創立100周年を記念して、1981年に現在の姿に造替されました。この法人は、1882年に出雲大社の第80代宮司である千家尊福（1845-1918）によって設立されました。出雲大社は、「出雲神道」と呼ばれる独自の教義を持ち、明治時代（1868-1912）に政府から認定された神道十三派の一つです。出雲大社と出雲大社教は別々の組織ですが、両者は密接に連携しています。